

一. 始めに

(一) 研究動機

近年、日本と台湾における依頼の会話調査が盛んになってきたが、ほぼ「ペンや本を借りる」ような物質的な負担の場面や、「調査を協力してもらう」ような労力的な負担の場面が設定されている。「お金を借りる」ような金銭的な負担の場面はいまだに調査されていない。「金銭的な依頼」のような心理的な負担がやや高い場面では、他の場面と異なり、どのように助けを求めらるか、コミュニケーションを取るか、対応するか、どのように工夫して人間関係を維持するか、様々なポイントが見られる上、両文化の金銭感覚・価値観・発想・国民性の違いも見られる。このような金銭感覚も、社会的・文化的な一つの側面であるため、異文化理解の一環として、「金銭的な依頼」も考察する必要があると考えている。

しかし、日本人はあまりお金の貸し借りはしないという話をよく聞いているが、本当にそうだろうか。2010年9-10月に、予備調査として、日本と台湾の大学生と院生(各20名)を対象に、「頼むか頼まないか」などを設問し、意識調査を行った。結果から見ると、親しい友人に対し、財布を忘れたため、昼食代(日:500円、台:100元)や教材費(日:1500円、台:300元)の一時的な借用は、日本人と台湾人とも90%以上頼む結果を示した。日本人大学生もお金の貸し借りをすることがうかがわれ、一概に日本人はあまりお金の貸し借りはしないとは言えない。このことから、本調査では、昼食代や教材費を借りる場面を設定し、調査を試みたい。

(二) 研究目的

文化の違いにより、依頼に対する負担認識や実際に取る言語行動も異なる。負担認識の意識や価値観の相違により、不適切な用件を依頼してしまい、不適切な断り方をしてしまう恐れもある。

依頼・承諾・拒絶の全般的な言語行動を通して、依頼に対する負担認識や実際に取る言語行動を分析し、より深い異文化理解が促進されることを期待

する。

異文化を理解するため、言語行動の背後に潜む文化意識・要因・発想などを探究することを目的とする。

二. 先行研究の課題と本研究への発展

日本と台湾に関する依頼の会話調査は、関口(2005、2006)、施信余(2006a、2006b)、徐孟鈴(2006、2007a、2007b)、李宜真(2008)などが挙げられる。

(一) **調査方法**について、李宜真(2008)は設問用紙を用いて、被験者は会話の一部を筆記回答させる形式の「談話完成テスト調査」を行った。一度に多くのデータが集められるという利点があるが、話者間のインターアクションを観察することができない欠点や、話し言葉を書かせる不自然さなどの欠点がある。

関口(2005、2006)と徐孟鈴(2006、2007a、2007b)は「ロールプレー調査」を、施信余(2006a、2006b)は「自然会話調査(電話会話)」を行った。

その中、関口(2005、2006)は、「断ってみてください」と規定し、徐孟鈴(2006、2007a、2007b)は、「2・3回断って、仕方なく引き受けてください」と規定していた。「自然会話調査(電話会話)」を行った施信余(2006a、2006b)も「断ったもの」のみ分析していた。「承諾したもの」はまだ研究されていない。

だが、藤森(1994)の調査では、中国語母語話者には「目上の人への依頼や誘いは絶対に断らないという社会文化的規範の存在が認められた」と指摘している。劉・小野(1996)は、「この示唆するところは、依頼者との社会的距離、心理的距離によっては、依頼を承諾するのが難しい状況であっても、また、自らの負担が大きくても、依頼を承諾する傾向、すなわち相手の意向に沿おうとする努力が見られるということである」と述べている。台湾にもこのような社会文化的規範の存在があると考え、「断ってください」などのような設定は、被験者の本当の意思が分からなくなり、不自然になりがちで

ある。本研究では被験者の本当の意思と自然さを尊重するため、承諾か拒絶か被験者に任せることにした。

(二) 分析方法について、中道・土井 (1995) によると、依頼談話の構造には基本的に「依頼する側が依頼内容を提示するまでの多少とも一方向的な段階」と、「依頼される側が何らかの反応を示し始めてからのインターアクションの段階」の二つの段階があり、「この二つの段階は明瞭な境界を持たなかったり、順序が入れ替わったりする」ことがある。すなわち、依頼を依頼者と被依頼者の相互行為として捉える視点が示唆されている。

日台に関する先行研究では、ほとんど「一方向的な言語表現」の分析に止まっている。例えば、「依頼の表現形式」(関口 2005・2006、徐孟鈴 2006・2007a・2007b)、「依頼のストラテジー、意味公式」(関口 2005・2006、徐孟鈴 2006・2007a・2007b、李宜真 2008)、「断りの意味公式、構成要素」(関口 2005・2006、施信余 2006a・2006b) における日本と台湾の「言語表現」の違いが比較されていた。

つまり、「依頼者か被依頼者の一方向的な段階」だけが分析されてきたが、「被依頼者の反応やインターアクションの段階」は複雑になっているため、まだ十分には検討されていない。本研究では、依頼側と被依頼側の「インターアクションの段階」の分析を試みるため、「言語表現」の分析ではなく、「言語行動」を分析することにする。

(三) 他に、意識調査について、「フォローアップ・アンケート調査」を行われた研究もある。関口 (2005、2006) は、依頼内容の負担の軽重に関わらず、上下親疎関係による「配慮度合」・「依頼しにくい程度」・「断りにくい程度」の変化を調査した。李宜真 (2008) は、親上・疎上・親同・疎同に本を借りる場面の「配慮度」・「間接度」・「親近度」・「距離度」・「改まり度」の変化を調査した。いずれも依頼する「人間関係」に対する調査である。

本研究では、異文化を理解するため、言語行動の背後に潜む文化意識・要因・発想などを探究するため、「人間関係」だけでなく、「負担の軽重」も加

え、「フォローアップ・インタビュー調査」を行う。

三. 調査概要

(一) 調査時期と対象

調査期間は、2009年11-12月に台湾の輔仁大学で、2010年12-2月に日本の広島大学で調査を実施した。

調査対象は、台湾人大学生と日本人大学生で、年齢は18才から23才までである。日台の会話調査の先行研究では、ほぼ日本語学科の台湾人大学生を対象に調査が行われたが、普段の言語表現などは学習している日本語に影響される可能性があるため、学習している言語に干渉されないように、日本語学科ではない台湾人大学生と中国語学科ではない日本人大学生を対象に調査を行った。他に、男女差の影響が現れるのを避けるため、日本と台湾両方も男女各半を対象とした。表3-1の通りである。

表3-1 会話調査の分析人数

会話調査の分析人数			
日本人大学生		台湾人大学生	
男性ペア	女性ペア	男性ペア	女性ペア
40名 (20組)	40名 (20組)	40名 (20組)	40名 (20組)
日本人 合計 80名 (40組)		台湾人 合計 80名 (40組)	
総計 160名 (80組)			

表3-1のように、台湾と日本をそれぞれ80名(40組)(男女各半)対象に、分析と考察を進める。

(二) 調査方法と内容

本調査では、自然会話に近く、大量に収集できる「ロールプレー調査」を採用した。ロールプレーをしてもらった上で、「フォローアップ・インタビュー調査」も行った。

被験者のロールプレーは、デジタルカメラとデジタルレコーダーで撮影と録音の両方を行った。被験者は最初に機器に慣れないため、やや不自然にな

る傾向があった。この不自然さと緊張感を緩和するため、最初の場面では、「昼食は何を食べるか、さきほどの授業はどうだったか、来週のレポートや試験の準備・・・」などの雑談から入らせて、次第に機器に慣れて自然になってから、本調査に入らせることにした。

本調査では以下のような場面や役割を決め、ロールプレーを行わせた。ただし、会話の自然さを確保するため、被験者の意思と自然さを尊重し、依頼を言い出せない行動も取り扱い、被依頼者に承諾か拒絶か被験者に任せることにする。

依頼者Aの状況：財布とキャッシュカードを家に忘れた上、今すぐ取りに帰れない

被依頼者Bの状況：今日必要な現金だけ持っているため、余分な現金はない

場面1：親しい友人に昼食代を借りる（以下「親・昼」と呼ぶ）

（昼食代 日：約500円、台：約100円）

場面2：親しい友人に教材費を借りる（以下「親・教」と呼ぶ）

（教材費 日：1500円、台：300円）

（※「親しい友人」とは、学校で一番親しい友人、よく会ったり話をしたり、一緒に行動をしたりしている友人とした。例えば、同じクラスで一番仲いい友人である。）

場面3：それほど親しくない友人に昼食代を借りる（以下「疎・昼」と呼ぶ）

場面4：それほど親しくない友人に教材費を借りる（以下「疎・教」と呼ぶ）

（※「それほど親しくない友人」とは、授業や部活などで共同作業をしたことがあるが、会ったら話しをする程度の関係で、必ずしも一緒に行動をするわけではない友人とした。例えば、隣のクラスの友人で、同じ選択科目の授業を受けて、週に一回か二回会っている友人とした。）

また、最後の「フォローアップ・インタビュー調査」では、「ロールプレートの会話内容についての感想や意見」、「普段、お金の貸し借りの経験はありますか?」、「お金を貸すとしたら、上限はいくらぐらいですか?」、「親しい友人とそれほど親しくない友人のどちらが断りにくいですか?どちらを助きたいですか?」、「今日余分な現金はないが、お金を下ろして貸しますか?」などのような質問をし、自由解答と意見を述べてもらう。

四. 分析と考察

依頼のロールプレーは、**依頼者**（以下は「**A**」と呼ぶ）と**被依頼者**（以下は「**B**」と呼ぶ）の自由会話で構成されたため、お互いに影響し合い、言語行動や反応の違いによって、異なる結果を展開・発展させていくと考えられる。

Aは一度依頼したら、Bは承諾・中立・拒絶などの反応が出て、それから、Aは受け入れる・再依頼・諦めるなどの行動を取る。Aは再依頼しても、Bは更に承諾・中立・拒絶などの反応が出て、それとも他の解決方法をお互いに考え出して、調整しながら、複雑なやり取りや展開をすることが観察できた。

以下は、「(一) Aの依頼行動」、「(二) Bの承諾・拒絶行動」及び「(三) まとめ」に分けて、分析と考察を行う。

(一) Aの依頼行動

まず、日本と台湾の全体の違いを見るために、「親・昼」(40組)、「親・教」(40組)、「疎・昼」(40組)、「疎・教」(40組) 4場面の計160組を分析する。

Aの依頼行動について、1.「依頼を言い出せなかった」と「依頼を言い出した」パターンが観察できた。「依頼を言い出した」場合、更に、「一回から四回以上の依頼」も見られた。

「一回から四回以上の依頼」のうちで、単純に「お金を借りる依頼」以外、「2. (1) お金を下ろしてもらおう再依頼」も現れた。「お金を借りる依頼」に対する「Bの反応」(承諾か拒絶)は「(二) Bの承諾・拒絶行動」の節で分析する。本節では2. (2) 「お金を下ろしてもらおう再依頼」に対する「Bの反応」(承諾か拒絶)の分析も試みる。詳しくは図4-1の通りである。

図4-1 Aの依頼行動 (n=160組)

A の 依 頼	1. A : 依頼を言い出した		A : 依頼を言い 出せなかった					
	日 155組 96.9%	台 <u>160組</u> <u>100%</u>	日 <u>5組</u> <u>3.1%</u>	台 0組 0%				
	1. A : お金の依頼 (回数)							
	(一回)		(二回)		(三回)		(四回以上)	
	日 131組 81.9%	台 115組 71.9%	日 19組 11.9%	台 <u>29組</u> <u>18.1%</u>	日 5組 3.1%	台 <u>13組</u> <u>8.1%</u>	日 0組 0%	台 <u>3組</u> <u>1.9%</u>
	2. (1) A : 「お金を下ろしてもらおう」再依頼							
	日 0組 0%		台 <u>8組</u> <u>5.0%</u>					
					2. (2) Bの反応			
	○ 承諾 6組 3.8%		× 拒絶 2組 1.2%					

1. 日本人は 160 組の中、「依頼を言い出せなかった」ケースを 5 組 (3.1%) 確認できた。一方、台湾人は 160 組 (100%) 全部「依頼を言い出した」。

2. 日本と台湾とも、「一回」だけ依頼した場合が一番多かった。「二回」と「三回」依頼した場合は、台湾の方が日本より多かった。「四回以上」の依頼は、台湾だけに 3 組 (1.9%) 現れた。つまり、台湾人は日本人より依頼回数が多かったのである。よって、台湾人は日本人よりお金を借りる依頼に抵抗感が少ないものである。インタビューでも、よくお金の貸し借りをするという返事は、台湾人が日本人より多かった。

3. 一度依頼しても、承諾してもらえず、二回目か三回目の依頼で、更に 2. (1) 「お金を下ろしてもらおうように」再依頼したケースも台湾人だけに 8 組 (5%) 見られた。2. (2) 「お金を下ろしてもらおう再依頼」に対する B の反応は、6 組 (3.8%) 承諾したが、2 組 (1.2%) 拒絶した。

次は、「1. A の依頼」、更に「2. A の『お金を下ろしてもらおう』再依頼」に分けて、日本と台湾の場面別を考察する。

1. A の依頼

まず、A の依頼行動・依頼回数の分析を試みる。依頼回数には、「ゼロ回」から、「四回以上」までの行動が観察できた。表 4-1 の示した通りである。

表 4-1 Aの依頼回数 (n=40 組) (「お金を下ろしてもらおう再依頼」も含まれた)

依頼回数	国別・場面別							
	日 親・昼	日 親・教	日 疎・昼	日 疎・教	台 親・昼	台 親・教	台 疎・昼	台 疎・教
お金の依頼を言い出せなかった(ゼロ回)	0組 0%	0組 0%	<u>1組</u> <u>2.5%</u>	<u>4組</u> <u>10.0%</u>	0組 0%	0組 0%	0組 0%	0組 0%
お金の依頼 (一回)	30組 75.0%	29組 72.5%	37組 87.5%	33組 82.5%	24組 60.0%	26組 65.0%	36組 90.0%	29組 72.5%
お金の依頼 (二回)	7組 17.5%	8組 20.0%	2組 5.0%	2組 5.0%	<u>10組</u> <u>25.0%</u>	7組 17.5%	<u>4組</u> <u>10.0%</u>	<u>8組</u> <u>20.0%</u>
お金の依頼 (三回)	3組 7.5%	1組 2.5%	0組 0%	1組 2.5%	<u>5組</u> <u>12.5%</u>	<u>5組</u> <u>12.5%</u>	0組 0%	<u>3組</u> <u>7.5%</u>
お金の依頼 (四回以上)	0組 0%	0組 0%	0組 0%	0組 0%	<u>1組</u> <u>2.5%</u>	<u>2組</u> <u>5.0%</u>	0組 0%	0組 0%
合計	40組 100%	40組 100%	40組 100%	40組 100%	40組 100%	40組 100%	40組 100%	40組 100%

1. 日本の「疎」の場面だけでは、「依頼を言い出せなかった(ゼロ回)」が確認できた(「疎・昼」1組、「疎・教」4組)。台湾は、言い出せなかった場面が0であるため、全員依頼を言い出した。

2. 「親」の人間関係に対し、日本人は20%以下二回依頼したが、三回になったら7.5%以下になり、四回になったら0となった。それに対し、12.5%の台湾人は三回依頼し、四回以上依頼した台湾人も確認できた(親・昼:1組2.5%、親・教:2組5.0%)。一方、「疎」の人間関係に対し、日本人と台湾人は多くとも二回ぐらいまで依頼できたが、三回になったら、日本はほんの僅かの2.5%以下だが、台湾は7.5%以下である。

この結果は、関口(2005、2006)の意識調査と、台湾人は互助精神により「比較的依頼しやすい」ものの、日本人は「できるだけ迷惑を掛けないようにするため、比較的依頼しにくい」という結果と近似している。

2. Aの「お金を下ろしてもらおう」再依頼

表 4-1「Aの依頼回数」では、「お金を下ろしてもらおう再依頼」も含まれ

たため、本節では、更に「(1) Aの『お金を下ろしてもらおう』再依頼」と「(2) Aの『お金を下ろしてもらおう』依頼に対するBの反応」に分けて詳しく考察を行う。

(1) Aの「お金を下ろしてもらおう」再依頼

Bに承諾をもらえなかったら、Aは諦めずに「お金を下ろしてもらおう再依頼」を言い出す言語行動は台湾人だけに見られた。表 4-2 の通りである。

表 4-2 お金を下ろしてもらおう再依頼 (n=40 人)

国別・場面別 再依頼	日	日	日	日	台	台	台	台
	親・昼	疎・昼	親・教	疎・教	親・昼	疎・昼	親・教	疎・教
A：お金を下ろして もらおう再依頼	0人 0%	0人 0%	0人 0%	0人 0%	0人 0%	0人 0%	6人 15.0%	2人 5.0%
合計	0人				8人			
分析数	40人 100%	40人 100%	40人 100%	40人 100%	40人 100%	40人 100%	40人 100%	40人 100%

表 4-2 の示したように、日本では、Bに承諾をもらえないと、Aはこのよ
うな「お金を下ろしてもらおう再依頼」を言い出さずに諦めたが、台湾人は「教
材費」場面では、「お金を下ろしてもらおう再依頼」を言い出した(合計 8 人)。
インタビューで日本人に伺ったら、台湾人のこういった再依頼が押し付けが
ましくて図々しいと思う日本人もいた。

(2) Aの「お金を下ろしてもらおう」再依頼に対するBの反応

続いて、依頼者Aは「お金を下ろしてもらおう再依頼」を言い出した後、被
依頼者Bはどのような反応及びやり取りをするか、調べてみる。

表 4-3 「お金を下ろしてもらおう再依頼」に対するBの反応 (n=40人)

再依頼に対する Bの反応	日				台			
	親・昼	疎・昼	親・教	疎・教	親・昼	疎・昼	親・教	疎・教
A:お金を下ろしてもらおう再依頼	0人 0%	0人 0%	0人 0%	0人 0%	0人 0%	0人 0%	6人 100%	2人 100%
<1>Bの反応:承諾					0人 0%	0人 0%	6人 100%	0人 0%
<2>Bの反応:拒絶					0人 0%	0人 0%	0人 0%	2人 100%

1. 台湾の「A:お金を下ろしてもらおう再依頼」の場面では、「親・教」の場合、Bの反応は全員「<1>承諾」(6人100%)であるのに対し、「疎・教」の場合、全員「<2>拒絶」(2人100%)と両極的な結果となった。台湾人は「親疎関係」で対応の差が強く感じられる。

お金を下ろしてもらおうように頼まれたら、日本人にとっては押し付けがましいが、台湾人は「親しい」友人に対し、全員断れず、承諾する結果を示した。

(二) Bの承諾・拒絶行動

次に、Bに承諾されたか、拒絶されたかにより、会話は異なる方向へ発展していく上、Aの反応や言語表現も異なるため、Bの承諾、拒絶行動も分析を試みる。

日本と台湾の全体の違いを見るために、「親・昼」(40組)、「親・教」(40組)、「疎・昼」(40組)、「疎・教」(40組)4場面の計160組を分析する。

Aは「依頼を言い出せなかった」場合、Bも「承諾・拒絶」の結論を下す必要はないが、Aは「依頼を言い出した」場面だけでは、Bは「1.承諾・拒絶」の結論を下す。そのうちで、「Bはお金を貸そうとした(承諾)が、Aは借りなかった」ケースも観察できた。

他に、「承諾」場面では、お金を貸す以上に、「2. Bの更なる好意行動」も確認できた。「Bの更なる好意行動」とは、Aは特に依頼しなくても、B

は余分な現金を持っていなくても、相手のために、自分自身から「お金を下ろしてあげる」・「更なる金額を貸す」・「食事を奢る」などのような申し出行為と定義する。

一方、「拒絶」場面では、「3. 補償行動」も確認できた。「補償行動」とは、Bは人間関係を維持するために、相手のために何らかの「代案」を提示し、関心を示し、若しくは、A自身からも、拒絶された気まずさを解消するために、自ら「代案」を提示し、やり取りをしながら、お互いにいい解決方法を見出すものである。このような「代案」や「解決方法」を言い出した行動は「補償行動」と定義する。詳しくは図 4-2 の通りである。

図 4-2 B の承諾・拒絶行動 (n=160 組)

A の 依 頼	A : 依頼を言い出した				A : 依頼を言い出せなかった			
	日	台	日	台	日	台	日	台
	155 組	160 組	5 組	0 組	96.9%	100%	3.1%	0%
B の 承 諾 ・ 拒 絶	1. B : 承諾				1. B : 拒絶			
	お金を貸した (承諾)		Bはお金を貸そうとしたが、Aは借りなかった (承諾)		お金を貸さなかった (拒絶)			
	日	台	日	台	日		台	
	74 組	<u>96 組</u>	6 組	<u>11 組</u>	<u>75 組</u>		53 組	
	46.2%	<u>60.0%</u>	3.8%	<u>6.9%</u>	<u>46.9%</u>		33.1%	
<u>日</u>		<u>台</u>						
<u>80 組</u>		<u>107 組</u>						
<u>50.0%</u>		<u>66.9%</u>						
2. 日 承諾場面の Bの更なる 好意行動		2. 台 承諾場面の Bの更なる 好意行動		3. 日 拒絶場面の 補償行動		3. 台 拒絶場面の 補償行動		
○	×	○	×	○	×	○	×	
8 組	72 組	<u>16 組</u>	91 組	62 組	<u>13 組</u>	50 組	3 組	
5.0%	45.0%	<u>10.0%</u>	56.9%	38.8%	<u>8.1%</u>	31.2%	1.9%	

1. 依頼者Aの依頼を受けた後、被依頼者Bに「お金の余裕がない」と規定したにも関わらず、日本と台湾とも 50%以上断れなく承諾したという結果が見られた。(日本：承諾 80 組 50% > 拒絶 75 組 46.9%。台湾：承諾 107 組 66.9% > 拒絶 53 組 33.1%。)

また、台湾（107組 66.9%）は日本（80組 50%）より承諾率が高い結果になった。逆に、日本（75組 46.9%）は台湾（53組 33.1%）より拒絶の割合が高かった。

他に、「Bはお金を貸そうとした（承諾）が、Aは借りなかった」場合、台湾（11組 6.9%）も日本（6組 3.8%）より多い結果となった。

台湾人は日本人より何回もしつこく依頼をするのに、なぜBの承諾を逆に諦めて借りなかったか興味深い。会話の内容から見たら、余分な現金を持っていないBに迷惑を掛けたくない上、このような状況のBに頼むより、日本人より気軽に再び他の人にも頼みに行けると思うので、諦めた結果に繋がるのであろう。それに対し、日本人は、それほど何回も頼めないため、一度頼んで失敗したら、二度と他の人に頼める勇気がなくなる可能性が示唆された。このため、Bの承諾に対して、台湾より受け入れる結果に繋がるのではないかと考えられる。

2. 「承諾」場面で、「Bの更なる好意行動(申し出)」について、台湾（16組 10%）は日本（8組 5%）より多い結果を示した。「承諾」と「更なる好意行動(申し出)」両方とも、台湾は日本より多いことから、関口（2005、2006）に指摘された通り、「台湾人は互助精神が強い」ことがうかがえる。

3. 「拒絶」場面では、人間関係を維持するために、何らかの「代案」、「関心」、「解決方法」などの「補償行動」を行う。しかし、日本の「補償行動」を行わない人（13組 8.1%）は、台湾（3組 1.9%）のより多い結果を示した。台湾人の角度から見たら、日本人のように補償行動を行わずに断られたら、冷たい印象を感じると推測できる。

続いて、「1. Bの承諾・拒絶」、「2. 『承諾』場面での更なる好意行動(申し出)」、「3. 『拒絶』場面での補償行動(代案)」に分けて、日本と台湾の場面別を分析する。

1. Bの承諾・拒絶

Aは「依頼を言い出した」場面では、Bは「承諾・拒絶」の結論を下すた

め、本節では、Bに承諾されたか、拒絶されたか、考察を試みる。

表 4-4 Bの承諾・拒絶行動 (n≠40組)

国別・場面別 承諾・拒絶行動	日	日	日	日	台	台	台	台
	親・昼	疎・昼	親・教	疎・教	親・昼	疎・昼	親・教	疎・教
依頼を言い出した場面 (Aは依頼を言い出せなかった場面を除いた)	40組 100%	39組 100%	40組 100%	36組 100%	40組 100%	40組 100%	40組 100%	40組 100%
(1) Bに承諾された	<u>28組</u> <u>70.0%</u>	<u>24組</u> <u>61.5%</u>	14組 35.0%	8組 22.2%	<u>30組</u> <u>75.0%</u>	<u>29組</u> <u>72.5%</u>	<u>23組</u> <u>57.5%</u>	14組 35.0%
(2) Bに承諾されたが、 Aは借りなかった	2組 5.0%	0組 0%	2組 5.0%	2組 5.6%	2組 5.0%	0組 0%	<u>3組</u> <u>7.5%</u>	<u>6組</u> <u>15.0%</u>
(1) + (2) Bに <u>承諾された</u> (小計)	<u>30組</u> <u>75.0%</u>	<u>24組</u> <u>61.5%</u>	16組 40.0%	10組 27.8%	<u>32組</u> <u>80.0%</u>	<u>29組</u> <u>72.5%</u>	<u>26組</u> <u>65.0%</u>	20組 50.0%
Bに <u>拒絶された</u>	10組 25.0%	15組 38.5%	<u>24組</u> <u>60.0%</u>	<u>26組</u> <u>72.2%</u>	8組 20.0%	11組 27.5%	14組 35.0%	<u>20組</u> <u>50.0%</u>

1. 表 4-4 の示した通り、台湾の「親・昼」、「疎・昼」、「親・教」、「疎・教」のいずれも、それぞれ日本の承諾率より高いことが示された。反対的に、日本は台湾より、拒絶する割合が高かった。具体的には、台湾人は所持金があまらなくても、日本人ほど断らず、少し貸すまたはお金を下ろして貸す人も多く観察できた。

2. 承諾場面に関して、日本と台湾とも、「親・昼」、「疎・昼」、「親・教」、「疎・教」の順にしたがって、承諾率が減少している。親疎に関わらず、「昼食代」(約 500 円)を承諾する割合は、「教材費」(1,500 円)を承諾する割合より高い結果となった。インタビューをしたら、普段貸せる金額の範囲は、大体「昼食代」(日本約 500 円、台湾約 100 円)程度 of 金額だという結果が出た。このため、日本と台湾とも、「金額」及び「借りる内容や理由」などが重要な判断基準だと言える。

日本は特にこうした傾向が強かった。日本は、親疎に関わらず「昼食代」(約 500 円)を 60%以上の人は貸すのに対し、親疎を問わず「教材費」(1,500 円)を貸す人は 40%以下であった。日本人は、「昼食代」か「教材費」かの

「金額」及び「借りる内容や理由」を重要視していると考えられる。

他方、承諾場面について、台湾は親疎に関係なく「昼食代」（約 500 円）を 70%以上貸すが、「親」の関係に対し、高い「教材費」（1,500 円）でも 65%以上貸すという結果を示した。日本の 40%より高かった。「教材費」（1,500 円）場面では、例え自分は所持金が少なくても、台湾は親しい友人を助きたい気持ちが強かったとうかがわれる。インタビューでは、親しい友人だからこそ助きたいという意見が多かった。親しい友人が頼みに来たらきっと困っているはずなので、「借りる内容」より、受け入れる範囲内の「金額」だったら、助けてあげたいという。台湾人にとって、「相手との関係」が重要な判断基準だと言える。これは、台湾人は日本人より「親疎関係」を意識しているという先行研究の結果と一致している。（関口 2005、2006 と李宜真 2008）

2. 「承諾」場面での更なる好意行動(申し出)

『承諾』場面での更なる好意行動とは、「承諾」場面の中で、Aに特に依頼されなくても、Bは余分な現金を持っていないが、相手のために自分自身から「お金を下ろしてあげる」・「更なる金額を貸す」・「食事を奢る」などのような申し出を言い出すことという。表 4-5 のような好意行動（申し出）が見られた。

表 4-5 Bの更なる好意行動(申し出) (n=40人)

国別・場面別 好意行動(申し出)	日	日	日	日	台	台	台	台
	親・昼	疎・昼	親・教	疎・教	親・昼	疎・昼	親・教	疎・教
(1) B: お金を下ろしてあげようと申し出た	1人 2.5%	0人 0%	4人 10.0%	1人 2.5%	1人 2.5%	1人 2.5%	6人 15.0%	4人 10.0%
	小計 6人				小計 12人			
(2) B: お金を下ろして、更に教科書を買って渡す			1人 2.5%	0人 0%			0人 0%	0人 0%
	小計 1人				小計 0人			
(3) B: お金を下ろして、昼食代や教材費だけでなく、更なる金額を貸そうと申し出た	1人 2.5%	0人 0%	0人 0%	0人 0%	1人 2.5%	0人 0%	1人 2.5%	0人 0%
	小計 1人				小計 2人			
(4) B: 食事を奢る(返さなくていいと申し出た)	0人 0%	0人 0%			2人 5.0%	0人 0%		
	小計 0人				小計 2人			
合計	2人 5.0%	0人 0%	5人 12.5%	1人 2.5%	4人 10.0%	1人 2.5%	7人 17.5%	4人 10.0%
	小計 8人				小計 16人			
分析数	40人 100%	40人 100%	40人 100%	40人 100%	40人 100%	40人 100%	40人 100%	40人 100%
	小計 160人				小計 160人			

1. 「(1) B: お金を下ろしてあげようと申し出た」好意行動は、「昼食代」(約 500 円) 場面より、「教材費」(1,500 円) の場面に多く現れた。なぜなら、「昼食代」(約 500 円) はまだ B の持っている金額の範囲内だが、「教材費」(1,500 円) はお金を下ろして行かないと持っていないためである。

台湾は日本より、「(1) B: お金を下ろしてあげようと申し出た」好意行動が著しかった。(台湾: 12 人 > 日本: 6 人。) インタビューでは、台湾人はお金を下ろしに行ってもいいという意見が多かったに対し、日本人はそこまでしなくていいという人が多かった。「教材費」(1,500 円) では、台湾と日本とも、「親」の関係に、「疎」の関係より、お金を下ろして貸す申し出・好意行動が多かった。(台湾: 「親・教」6 人 15% > 「疎・教」4 人 10%、日本: 「親・教」4 人 10% > 「疎・教」1 人 2.5%。)

2. 「(2) B: お金を下ろして、更に教科書を買って渡す」と「(3) B お金を

下ろして昼食代や教材費だけでなく、更なる金額を貸そうと申し出た」の好意行動は、日本と台湾とも親しい友人だけに現れた。「(4) B : 食事を奢る」(返さなくていいと申し出た)の好意行動は、台湾も親しい友人だけに現れた。

3. 「教材費」(1,500円)場面では、日本人は親しい友人のために「(2) B : お金を下ろして、更に教科書を買って渡す」実例は1人2.5%見られた。他に、親しい友人に、「(3) B : お金を下ろして、昼食代や教材費だけでなく、更なる金額を貸そうと申し出た」好意行動は、日本は1人2.5%、台湾は2人5%見られた。

「昼食代」(約500円)場面では、台湾は親しい友人に、「(4) B : 食事を奢る」の好意行動(2人5%)が現れた。それは親しい友人に、食事代を貸すことではなく、財布を忘れた友人に食事を奢るという好意に基づいた行動であった。

3. 「拒絶」場面での補償行動(代案)

『拒絶』場面での補償行動(代案)とは、Bはお金を貸せなくても、人間関係を維持するために、相手のために何らかの「代案」を提示し、「関心」を示し、「解決方法」などは行動という。若しくは、A自身からも逃げ道を作り、提案し、お互いにいい解決方法を見出すものである。AかBのこのような「代案」、「関心」、「解決方法」などは「補償行動」という。

拒絶後、人間関係を維持するため、何かの補償行動(代案)が期待されるが、文化により、こういった補償行動(代案)の内容・期待度も異なると考えられる。まず、「補償行動(代案)の有無」を分析する。

表 4-6 Bの補償行動(代案)の有無 (n=40組)

国別・場面別 補償行動(代案)	日	日	日	日	台	台	台	台
	親・昼	親・教	疎・昼	疎・教	親・昼	親・教	疎・昼	疎・教
Bの拒絶場面	10組 100%	24組 100%	15組 100%	26組 100%	8組 100%	14組 100%	11組 100%	20組 100%
補償行動(代案) <u>あり</u>	9組 90.0%	23組 95.8%	9組 60.0%	21組 80.8%	<u>8組</u> <u>100%</u>	<u>14組</u> <u>100%</u>	9組 81.8%	19組 95.0%
補償行動(代案) <u>なし</u>	1組 10.0%	1組 4.2%	<u>6組</u> <u>40.0%</u>	<u>5組</u> <u>19.2%</u>	0組 0%	0組 0%	<u>2組</u> <u>18.2%</u>	<u>1組</u> <u>5.0%</u>

1. 「拒絶場面」では、台湾は「親」の関係に対し、補償行動(代案)を行った人は100%である。だが、「疎」の関係に対して、80%以上は補償行動(代案)を行っているが、補償行動(代案)を行わなかった台湾人は、「疎・昼」18.2%、「疎・教」5.0%もいた結果を示した。

一方、補償行動(代案)を行わなかった日本人は、いずれの場面とも台湾人より多かった。「親」の人間関係に対し、「台湾」の0%に比べ、日本は「親・昼」10%、「親・教」4.2%補償行動(代案)を行わなかった。特に、「疎」の人間関係に対し、補償行動(代案)を行わなかった日本人は、「疎・昼」40%、「疎・教」19.2%にも及んだ。

台湾人にインタビューしたら、普段お金の貸し借りはよくあることであると回答した人が多かったため、補償行動(代案)を期待する人も多いと考えられる。台湾人の角度から見たら、日本人のように補償行動(代案)を行わずに断られたら、冷たい印象を感じると推測できる。

日本人の角度から見たら、インタビューでは、お金を借りる人自体が悪かったと回答した人も多かったため、むしろ補償行動(代案)もそれほど期待しないと考えられる。

関口(2005、2006)の意識調査では、日本人は「比較的にドライに断る」ものの、台湾人は「なるべく断らない」結果と近似している。

文化や環境の違いにより、補償行動(代案)の内容も異なると考えられる。

補償行動(代案)には、「(1) Aのために、友人(第三者)に頼んであげる」、「(2)教科書をAにコピーさせてあげる」、「(3)授業でAに見せてあげる」、「(4)教材費を後日支払うように勧める」、「(5)先に他に聞いてみて、なかったら貸す」と「(6)他に頼むように勧める」がある。表4-7は「Bの補償行動(代案)の内容」である。

表4-7 Bの補償行動(代案)の内容 (n≠40組)

国別・場面別 補償行動(代案)	日	日	日	日	台	台	台	台
	親・昼	疎・昼	親・教	疎・教	親・昼	疎・昼	親・教	疎・教
Bの拒絶場面	10組 100%	15組 100%	24組 100%	26組 100%	8組 100%	11組 100%	14組 100%	20組 100%
	75組 100%				53組 100%			
補償行動(代案) なし	1組 10.0%	6組 40.0%	1組 4.2%	5組 19.2%	0組 0%	2組 18.2%	0組 0%	1組 5.0%
	13組 17.3%				3組 5.7%			
(1) Aのために、友人 (第三者)に頼んであ げる	0組 0%	<u>3組</u> <u>20.0%</u>	1組 4.2%	<u>2組</u> <u>9.7%</u>	0組 0%	0組 0%	<u>3組</u> <u>21.4%</u>	<u>2組</u> <u>10.0%</u>
	<u>6組 8.0%</u>				<u>5組 9.4%</u>			
(2)教科書をAにコピー させてあげる	/	/	<u>1組</u> <u>4.2%</u>	<u>3組</u> <u>11.5%</u>	/	/	0組 0%	0組 0%
	4組 5.3%				0組 0%			
(3)授業でAに見せて あげる	/	/	<u>9組</u> <u>37.5%</u>	<u>8組</u> <u>30.8%</u>	/	/	0組 0%	0組 0%
	<u>17組 22.7%</u>				0組 0%			
(4)教材費を後日支払 うように勧める	/	/	0組 0%	0組 0%	/	/	<u>3組</u> <u>21.4%</u>	<u>7組</u> <u>35.0%</u>
	0組 0%				<u>10組 18.8%</u>			
(5)先に他に聞いてみ て、なかったら貸す	0組 0%	0組 0%	1組 4.2%	0組 0%	0組 0%	0組 0%	1組 7.2%	2組 10.0%
	1組 1.4%				3組 5.7%			
(6)他に頼むように勧 める	<u>9組</u> <u>90.0%</u>	<u>6組</u> <u>40.0%</u>	<u>11組</u> <u>45.8%</u>	<u>8組</u> <u>30.8%</u>	<u>8組</u> <u>100%</u>	<u>9組</u> <u>81.8%</u>	<u>7組</u> <u>50.0%</u>	<u>8組</u> <u>40.0%</u>
	<u>34組 45.3%</u>				<u>32組 60.4%</u>			

1. 「(1) Aのために、友人(第三者)に頼んであげる」補償行動(代案)につ
いて、日本は、「疎」の人間関係で「親」の関係より、自分の友人(第三者)
に頼んであげる傾向が見られた。(「疎・昼」3組20.0%、「疎・教」2組9.7%
> 「親・教」1組4.2%。)インタビューでは、それほど親しくない人に頼ま

れたら、きっと他に頼める人がいないだろうと想定できるので、親しい人より断りにくいという意見もあったため、お金を貸せなかったら、「自分の友人(第三者)に頼んであげる」という断りへの代案が親しい人より多かったのだろう。

2. 日本と台湾とも、「教材費」(1,500円)を断った後、「(6)他に頼むように勧める」補償行動(代案)を行った人が最も多い結果を示した。(日本は34組45.3%、台湾は32組60.4%。)

3. 続いて、日本は、「(3)授業でAに見せてあげる」(17組22.7%)と「(1)Aのために、友人(第三者)に頼んであげる」(6組8.0%)補償行動(代案)を行った人は、二番目と三番目に多かったが、台湾は、「(4)教材費を後日支払うように勧める」(10組18.8%)と「(1)Aのために、友人(第三者)に頼んであげる」(5組9.4%)補償行動(代案)を行った人は、二番目と三番目に多かった。

日本の場合は、まだ教材を持っていないが、今日は教材を用意する日なので、授業前にお金を借りて生協で買うという場面を設定したため、Aはまだ教材を持っていないので、Bは「(3)授業で見せてあげる」という行動を行ったためである。

一方、台湾の場合は、教材を既に手元にあったが、今日は教材費納付の期限日なので、相手に教材費を借りるという場面を設定したため、台湾のAは既に教材を持っているが、教材費をまだ払っていないため、「(4)教材費を後日支払うように勧める」行動を行った。

要するに、環境の違いにより、このような内容の違いが現れたと考えられる。

(三) まとめ

分析と考察の結果、以下の点が明らかになった。

1. 「**依頼行動**」について、台湾は日本より「依頼回数」が多かった上、「お

金を下ろしてもらって再依頼」も現れたため、台湾は日本より「頼みやすい」結果が解明された。

反対に、日本は台湾より「できるだけ迷惑を掛けないようにするため、比較的頼みにくい」ことがわかった。

2. 「承諾・拒絶行動」に関して、台湾は日本より「承諾率」が高く、「断らない」人が多いことが判明した。「承諾率」が高い他、「更なる好意行動(申し出)」(お金を下ろしてあげる・更なる金額を貸す・食事を奢る)を行う人も日本より多いことがわかった。台湾人は断るなら、ほぼ補償行動(代案)を伴うのに対し、日本人は補償行動(代案)を伴わない場合も比較的多いことが確認できた。

3. 日本人の角度から見たら、台湾人の依頼行動は押し付けがましくて図々しいイメージを持っているが、台湾人の角度から見たら、日本人の拒絶行動は冷たい印象を感じると推測できる。実際、台湾人は押し付けがましく依頼したが、相手も頼みに来たら断らずに助ける傾向がある。日本人は比較的ドライに拒絶する傾向があるが、相手に配慮し、なるべく相手に迷惑を掛けないようにしている。

4. 他に、承諾するか拒絶するかについて、日本と台湾とも、「親疎」、「金額」及び「借りる内容や理由」を考慮している。日本は台湾より、「金額」及び「借りる内容や理由」を重要視しているが、台湾は日本より、「親疎」を重要視している結果を示した。

5. 台湾と日本とも、「親」の関係に対して、「承諾率」が高かった上、「承諾後の更なる好意行動」も多かったので、「疎」の関係より、「親」の関係を助けたい気持ちが比較的強いことがわかった。しかし、「疎」の関係に対して、日本は拒絶後の「友人(第三者)に頼んであげる」補償行動は、「親」の関係より多かった。他に頼める人がいないと想定したので、日本は台湾より「疎」の人間関係に、やや配慮をするため、気を遣っていることが見られた。

五. 今後の課題

ロールプレー調査では、様々なインターアクション（やり取り）が現れたため、本研究では、「言語行動」のみ論証した。「言語表現」の分析については、今後の課題として、稿を改めて論ずることとする。他に、インタビュー調査の内容、意見及び傾向も、別稿に譲ることとしたい。

参考文献

- 施信余 (2006a) 「『依頼・断り』のコミュニケーションについて—日本人同士と台湾人同士による電話会話の分析から—」待遇コミュニケーション研究会編『待遇コミュニケーション研究』4、pp. 17-32
- 施信余 (2006b) 「日本語における『依頼・断り』のコミュニケーションについて—日本人女子大学生同士の電話会話を分析対象に—」早稲田大学大学院日本語教育研究科編『早稲田大学日本語教育研究』8、pp. 51-62
- 徐孟鈴 (2006) 「依頼会話の【終結部】の考察—日本人・台湾人・台湾人上級学習者の接触場面のロールプレイデータを比較して—」名古屋大学大学院国際言語文化研究科編『言葉と文化』7、pp. 67-84
- 徐孟鈴 (2007a) 「依頼会話【先行部】の考察—日本語母語場面・台湾人母語場面・日台接触場面のロールプレイデータを比較して—」名古屋大学大学院国際言語文化研究科編『言葉と文化』8、pp. 219-237
- 徐孟鈴 (2007b) 「上級の台湾人日本語学習者の『再依頼のストラテジー』—日台両母語場面のロールプレイデータと比較して—」表現学会編『表現研究』85、pp. 22-33
- 関口剛司 (2005) 『日本語の依頼側と被依頼側表現の研究—日台異文化コミュニケーションの視点から—』東呉大学修士論文
- 関口剛司 (2006) 「日本語による断り表現の—考察—日台異文化間コミュニケーションの視点から—」銘傳大學應用語文學院應用日語學系『銘

- 傳日本語教育』9、pp. 112-136
- 中道真木男・土井真美(1995)「日本語教育における依頼の扱い」『日本語学』14-11、pp. 84-93
- 藤森弘子(1994)「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー—『断わり』発話行為の場合—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』1、pp. 1-17
- 李宜真(2008)「依頼の言語行動に関する日中語対照研究—ポライトネスの観点から—」東北大学高等教育開発推進センター編『東北大学高等教育開発推進センター紀要』3、pp. 117-129
- 劉玉琴・小野由美子(1996)「中日母語話者の『断り』発話行為に見られる相違について」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』42-2、pp. 540-545